

ライプツィヒ時代の嶋崎赤太郎

—ライプツィヒ音大に残された史料を中心に—

小野 亮 祐

(北海道教育大学教育学部釧路校)

Akataro Shimazaki in der Leipziger Zeit

Ryosuke ONO

Zusammenfassung

Akataro Shimazaki ist ein bedeutender japanischer „Musicus“, und zwar ein gelehrter Musiker. Eigentlich ist er in Japan als Organist, Orgellehrer und ein Mitglied vom Redaktionsmitglied(im Kompositionsgebiet) von Lehrmaterial für Grundschule(Jinjo Shogaku Shoka). Aber er ist auch ein bedeutender Lehrer für Harmonielehre an der Hochschule für Musik Tokio(Tokyo Ongaku Gakko). Ausserdem sein pädagogischer Einfluss im Gebiet von Harmonielehre in Japan bis zur 2. Weltkriegszeit war sehr gross. Der Grund dazu war sein Studium am Konservatorium Leipzig(jetztige Leipziger Hochschule für Musik und Theater) . Also sein Leipziger Studium hatte ein bedeutender Sinn für die ganze japanischer Musikpädagogikgeschichte. Hier beleuchte ich sein Leipziger Studium anhand von an der Hochschule für Musik und Theater Leipzig erhaltenen Dokumenten.

I. はじめに

嶋崎赤太郎(1874-1933)は、明治・大正・昭和初期に活躍した「音楽家」である。学校教育の分野での重要な業績として、1906年に唱歌編集委員に命じられ『尋常小學校讀本唱歌』や『尋常小學校唱歌』の作曲・選定・編纂に携わったことがあげられる。

また演奏家としては、オルガニストとしての顔を有しており、東京音楽学校でオルガンを教えていた。しかも、執筆した『オルガン教本』は100以上の版を重ね、戦前のオルガン教育または師範学校などで幅広く使われていたとされる(赤井1995)。

一方で東京音楽学校では音楽理論・和声なども講じるなど、音楽理論の方面での業績も無視できない。嶋崎はドイツ後期ロマン派の音楽家ヤーダースゾーン Salomon Jadassohnの教本をいくつか翻訳・校閲しているが、ヤーダースゾーンの和声理論は大正期には和声教育の主流となり、戦後にまで影響を残していたという(森田・松本2008)。その他いくつかのヤーダースゾーンの教本、クレー Ludwig Kleeのバロック・古典期の鍵盤楽器における装飾音奏法教本など、少なからぬドイツ系の音楽教本の翻訳・校閲に携わりながら日本に紹介し、また自らも理論系の教本類を執筆している。

これらの仕事を成し遂げた背景・土台として、嶋崎がドイツのライプツィヒに留学していたという事実にも注目されてよいだろう。滝廉太郎が同地の音楽院に留学し、病を得てわずか数ヶ月の在学期間で志半ばにして帰国を余儀なくされたことは、よく知られるところである。しかし、その滝廉太郎に一年遅れること1902年、嶋崎は同音楽院に文部省の給費留学生として留学し、4年あまりにわたってオルガン、作曲・音楽理論、ピアノを修めて帰国していることは、ほとんど知られていない。また、嶋崎が留学する直前まで同音大における音楽理論を担当していたのが、先に挙げたヤーダースゾーンであり、本論を先取りすると、そのヨーロッパにおける影響力は大きいものであった。つまり、嶋崎自身の音楽理論・唱歌・オルガンの業績とその後の影響を鑑みると、嶋崎のライプツィヒ留学は、大正期以降の日本の音楽教育における

幅広い分野において、ドイツやライプツィヒ系の教育の影響を及ぼすのに決定的な意味を有していたといえよう。

筆者は、ドイツと日本における音楽教育的な関係に注目し研究を進めているが、そのうえでも嶋崎の留学は日本の音楽教育や近代音楽史にとって、著名となった滝のライプツィヒ留学よりもはるかに重要な意味を持つと考えている。しかしながら、嶋崎のライプツィヒ留学については従来あまり真正面から取り組んでこられなかった。赤井（1995）の研究が、日本のオルガン史との関連でまとまった言及を行っているのと、近年では鈴木治氏が学会で発表報告（鈴木 2010, 2011）^{注1}を行っている程度というのが実情である。本論では、尋常小学唱歌、オルガン教育、和声教育など多岐にわたり嶋崎の果たした業績について取りかかる前に、その大きな土台作りとなったであろう「ライプツィヒ留学」について、嶋崎が留学したライプツィヒ音大に残された資料（Lehrzeugnis 評価書など）に限って手がかりとして考察したい。

II. 嶋崎赤太郎の生涯と業績の概観…尋常小学唱歌とオルガンの影に見落とされがちな理論的業績

表1は、1995年の赤井の研究に基づき時系列にまとめた嶋崎の理論的著作を中心とした業績の一覧である。網掛け部分は、ライプツィヒ留学時期に該当する。留学以前にもオルガン教則本を執筆して多く版を重ねているが、特に留学以降の唱歌や和声を中心とした業績が目立っている。

表1 嶋崎赤太郎の理論的著作を中心とした業績年表

1874	東京に生まれる	
1889	東京音楽学校入学（師事した教員の中にルドルフ・デイトリッヒ）	
1899	『オルガン教則本Ⅰ』	自著
1900	『オルガン教則本ⅠⅡ』	自著
1902	『唱歌教科書』（検定教科書・共益商社）	編纂・委員
	ライプツィヒ留学開始（3月出発）	
	東京音楽学校教授（6月）	
	ライプツィヒ音楽院入学（9月）	
1906	留学を終えて帰国（6月）	
	邦楽調査委員・文部省唱歌編纂委員就任	編纂・委員
1907	『中等唱歌』編纂委員	編纂・委員
1908	福井直秋著『初等和声』を校閲・出版	校閲
	楽語調査委員	編纂・委員
1909	『尋常小学唱歌』編纂委員	編纂・委員
1910	この年から『オルガン自修法』、『和声学解題』を順次『音楽』（東京音楽学校校友会雑誌）に連載	自著
1913	E.F. リヒター・浅田泰順訳『新訳律氏和声学』を校閲・出版 原題：Lehrbuch der Harmonie(1853/1894)	校閲
1921	福井直秋『和声学教科書』出版	校閲
1926	『新訳律氏和声学解題』出版	翻訳
	L. クレー『古典ピアノ楽の装飾音』出版	
	原題：Die Ornamentik der klassischen Klavier-Musik	翻訳
1930	『詳解楽語辞典』出版	自著
	『例題の鍵：ヤーダソン著和聲學教科書』出版	翻訳
1931	S. ヤダスゾーン『対位法教科書』出版 原題：Lehrbuch des einfachen, doppelten, drei- und vierfachen Kontrapunkts.1884	翻訳
1933	死去	

1926年刊のクレーの『古典ピアノ楽の装飾音』の翻訳は、バッハからベートーヴェンまでの装飾音楽法を解説した教本である。これはバロックから古典派にかけての鍵盤楽曲の古い装飾音の解説書で、いわゆる古楽奏法の解説書と言っても良いであろう。つまり、日本で最初期の古楽奏法の解説である可能性が高い。

また、理論書関係で特に目立つのは和声関連の業績である。留学以前から専門であったはずのオルガン

に関するものよりも、多くの業績を上げていることがわかる。しかも、嶋崎の留学先であるライブツイヒ音楽院の和声の教員だったリヒターとヤーダースゾーンの著書の翻訳・校閲が目立つ。森田氏・松本氏の2008年の研究が明らかにしているところによれば、これらの和声教本は、当時の東京音楽学校における和声の授業の標準的なものであり、戦後に至るまで影響を与えたという。それに鑑みると、嶋崎の戦前から戦後までの和声教育に与えた影響が大きかったことは想像に難くない。

また、赤井の研究(1995)によれば、留学後の嶋崎のオルガン演奏活動は留学以前に比べてきわめて限定的となっていることから、留学によって嶋崎の興味は大きく理論的な方面へ転向したか、あるいは留学時にすでに周囲から理論的な成果を上げることが期待されていたと言うことが推測される。いずれにしても、留学を境に理論方面へのシフトが見られることは確かである。その、大きな契機と見られるライブツイヒ留学とは一体どのようなものだったのか、ライブツイヒ音大に残された史料からその一端を明らかにしたい。

Ⅲ. ライブツイヒ時代の嶋崎赤太郎を取り巻く環境…ライブツイヒ音大を中心に

1) ライブツイヒ音楽院で何を学んだか?…Inskription(学籍簿), Lehrzeugniss(評価書)と1902-5年の入学案内・履修案内, 試験規則(1908年)より

まず、留学期間について明らかにしておきたい。赤井(1995)の研究によれば、嶋崎は1902年3月に文部省給費留学生として、まず3年間の予定で留学したことが明らかになっている。しかし実際の帰国は1906年6月で、延べ4年3ヶ月ほど留学の留学期間であった。音楽院に残された嶋崎の学籍簿(Inskription)によれば、在学した期間は1902年9月から1905年の復活祭まで、すなわち日本流に言えば1902年度の後期から1904年度の後期までの2年半の在学期間であった。ここで注目されるのは、ライブツイヒにははずだが音楽院に在学していない期間1905年4月~1906年6月の存在である。赤井の研究によれば、3年間の国費留学の期間は1905年の音楽院卒業の時期で切れており、残るこの期間は許嫁であった白井家(共益商社社長)に資金援助を求めていることが明らかとなっている。

次に、嶋崎が音楽院で何を勉強したのかを、先行研究(赤井1995)、音楽院に残っている嶋崎の学籍簿、評価書(Lehrzeugniss)、履修案内、嶋崎の著書「詳解楽語辞典」の著者紹介から検討してみたい。まず、赤井の研究(1995)では、オルガンをパウル・ホーマイヤー、理論をフーゴー・リーマンに学んだとされている。しかし、当時の履修案内を網羅的に調べた結果リーマンは嶋崎在学中の音楽院の教員一覧には記載がなく、少なくとも音楽院では公式に学んではないことがわかる。このことについても後ほど、若干の考察を加えてみたい。

次に学籍簿を見てみると、主専攻はオルガン、副科でピアノ、和声と書かれている。学籍簿はそもそも入学願書として記入・提出されたものであるから、ここでは留学当初の希望が明らかにされていると言って良いであろう。嶋崎自身の著書『詳解楽語辞典』の著者紹介欄には「オルガンと作曲の研究」をしたと記されているが、これは帰国後の嶋崎自身の留学への実感・評価、ないしは周囲の評価として捉えることができる。

そして、卒業時に作成される音楽院の評価書には、ピアノの評価をハインゼン Carl Heynsen (1859-?)、オルガンの評価をホーマイヤー Paul Homayer (1853-1908)、作曲・理論の評価をパウル Emil Paul (1868-1936)がそれぞれ書いていることから、この3分野をそれぞれの教師について学んだことがわかる。ちなみにヤーダースゾーンは、1902年3月になくなっており、嶋崎が日本を出発する1ヶ月前にこの世を去っている。

最後に、履修案内を見てみると、オルガンを主専攻とする者は、副科としてピアノと和声・音楽理論、合唱を履修することが必修となっていることがわかる。以上から、留学当初はオルガンが主目的で、あくまでも和声・理論は副科であったと言えるが、帰国後の実感として実際には理論方面についても重点的に学んだということが考えられる。

2) 嶋崎の教師たちと嶋崎への評価

それでは次に、嶋崎は副科を含めたこれらの分野でどの程度の成果を上げたのか、各教師のしたための評価書と1908年の卒業試験規則から探り、またこれらの教師の簡単なプロフィールから、どのような教

師の影響の元で留学を行ったのかを確認したい。

嶋崎の主専攻のオルガンの担当教員ホームマイヤーは、ライプツィヒ大学で薬学を学びながら、後に音楽院で学んでオルガンに転向したという変わり種の経歴の持ち主であるが、ゲヴァントハウスのオルガニストに就任し、ヴィルッオーブ奏者として当時は名高い音楽家であった。また、嶋崎の留学当時はちょうど音楽院においてオルガニスト養成組織の立ち上げに向けての機運が高まっており、ホームマイヤーはそのオルガニスト養成所 Organistenschule（音楽院教会音楽研究所の前身）の主任でもあった。

彼の評価は嶋崎の熱心さを大きく評価しながらも、演奏レベルについては「主専攻のオルガンは中級 Mittelstufe までの到達であり、これからの成長が期待されるが、短い期間で早く学業を終えねばならないことは残念である。」としている。

1908年の試験規則には、具体的にホームマイヤー編纂のバッハオルガン曲集第2巻が卒業要件のレベル（第1巻＝初級、第2巻＝中級、第3巻＝上級）とされている。この曲集は3巻からなり、第1巻が難易度の低い小さなプレリウド集、第2巻が二短調のトッカータとフーガなどの比較的規模の大きい作品、と段階を追っていることから、ホームマイヤーの述べる中級程度とは具体的にはこの程度のことを述べているものと思われる。また、週に2回開かれた音楽院内部の演奏会（引き合い会）である Vortragsabend や、成績優秀者が出演する公開卒業試験には出演していないことから、シベリアに嶋崎の演奏レベルを見ると当時の音楽院内では決して成績優秀の学生とはいえなかったとも推測される。

また、ホームマイヤーの書きぶりからもう一つ指摘されるのは、前述のように音楽院卒業後さらにライプツィヒ滞在を延長しているのにもかかわらず、オルガンの勉強は延長していないことである。つまり、嶋崎の留学延長の意図はオルガンの勉強のためではないということが推測されるのである。

【試験規則（1908）：主専攻オルガン】

J.S. バッハの Clavierbüchlein コラール小曲集を終えていることが試験を受ける前提。

1. コラール小曲集から試験官より1曲指定
2. a)古い作曲家の作品からホームマイヤー編纂のバッハオルガン曲集第2巻程度の難易度のものと、
バッハのオルガン作品（試験官より指定） b)最近の作曲家の作品から自由選択曲（難易度 a と同じ）
3. 初見視奏（中程度のものから試験官が選択）
4. オルガンの歴史、文献についての口頭試問

つぎに音楽理論・和声の評価を見てみたい。担当教員パウルは同音楽院の出身で、ヤーダースゾーンに作曲・理論を学んでいる。またパウルはオルガニストでもあり、後年オルガニスト養成所の発展的解消により開設された教会音楽研究所の主任教授になるなど、本来はオルガニスト畑の人物だったと言って良いだろう。パウルの嶋崎への評価はホームマイヤーと同様にその熱心さを大いに評価しながら、学習の成果としては「和声法、対位法、カノン、フーガを最良の成果を持って修めた。」としている。試験規則を見ると、その要求されている程度は和声法とともに、簡単な対位法までとされている。評価書を文字通り受け取ると、副科として要求されているよりも多少なりとも上回る成果を上げたと言えるだろう。

【試験規則（1908）：副科音楽理論】

1. 楽典、和声法、簡単な対位法についての口頭試問
2. 4声体の和声課題と和声分析
3. 簡単な対位法課題
4. 楽式論での主要形式についての試問、提示された楽曲の形式分析
5. 音楽史：1500～現代までの主要な音楽史の出来事
6. 聴音

次に副科ピアノの評価を見てみたい。担当教員のハインゼンもライプツィヒ音楽院出身で、ライプツィヒの主要教会であるニコライ教会のオルガニスト、オルガニスト養成所所長代行もつとめており、ピアノ

担当であったとはいえ、ホーマイヤーやパウルと同様オルガニスト畑の人物であったことがわかる。ハインゼンも嶋崎の熱心な姿勢を大きく評価しながら「練習曲で始めた2年半の熱心な研究で才能を伸ばし、賞賛に値する優れた進歩を遂げた。」と述べている。練習曲については、試験規則に修了前提としてチェルニーの *Kunst der Fingerfertigkeit Op.740* (いわゆる日本で言う『50番練習曲』) と『クラマー・ビューローの練習曲集』が挙げられていることから、おそらくこれらが用いられたものと考えられる。あまり具体的には書いていないが、好意的な文面からは嶋崎はハインゼンの指導の元でピアノの腕を上げたことが伺える。

【試験規則 (1908) : 副科ピアノ】

チェルニーの *Kunst der Fingerfertigkeit Op.740* (いわゆる50番練習曲) とクラマー・ビューローの練習曲集を終えていることが受験の前提。

1. 上記のチェルニー、クラマー・ビューローの練習曲集から試験官指定の曲、
2. モーツァルト、ベートーヴェンのソナタ、ないしはその他のロマン派の中程度の難易度の楽曲 (自由選択曲)
3. アリアか器楽曲の伴奏の初見視奏 (試験官指定)

最後に、直接嶋崎が学んだライプツィヒ音楽院における音楽理論の歴史的な流れについて若干確認をしておきたい。嶋崎の師パウルや滝が和声を学んだヤーダースゾーンは、ライプツィヒ音楽院でハウプトマン Moritz Hauptmann (1792-1868) とリヒター Ernst Friedrich Richter (1808-1879) に師事している。また和声教科書である *Lehrbuch der Harmonie* (1853) を著しており、合計23版1923まで出版、英、仏、オランダの各国語に翻訳されるなど、ライプツィヒのみならずヨーロッパで大きな存在感を持った理論系の教師だったと考えられる。その影響関係からは二人の師のうちハウプトマンよりもリヒターの影響下にあったとされている。そのリヒターもライプツィヒ音楽院の和声・音楽理論の教師であり、主著とも言うべき和声教科書 *Lehrbuch der Harmonie* (1853) はライプツィヒ音楽院の教科書として出版されて、以後合計36版1953年まで出版された。英、仏、露、デンマーク、スペイン、オランダ、イタリアの各国語に翻訳されるなど、当時のヨーロッパにおけるベストセラー和声教本であり、他の音楽学校でも用いられた。また、この教科書には準拠の例題集があり、それは合計62版1952年まで版を重ねていた。つまり当時のドイツ、ヨーロッパではさしずめ日本で言う「芸大和声」のようなものであり、リヒターはその著者という存在だったのではないかと考えられる。

以上から、嶋崎はオルガニストの教育の整備された音楽院でオルガンを学び、また理論に関しては当時のヨーロッパを大きく席捲したリヒターを始祖とするライプツィヒ音楽理論学派の伝統を受け継ぐ教育を受けたことがわかる。帰国後のヤーダースゾーン、リヒターの和声教科書の翻訳・校閲は、いわば当時におけるヨーロッパの有力な和声教授法を、日本に大きく広めるものとなったと言える。

3) 音楽院の外で何を学んだか…ライプツィヒにおける音楽環境

最後に、音楽院以外における音楽教育の機会について若干触れて本稿を閉じたい。音楽院の履修案内には、音楽院外での音楽を学ぶ機会が3点記されている。1点目が教会音楽 (これはすなわち、かつてバッハがトーマスカントールをつとめたトーマス教会での土曜・日曜の音楽付き礼拝のこと)、2点目がゲヴァントハウスでの催し (これはゲヴァントハウス・オーケストラと弦楽四重奏団の演奏会無料入場の権利)、そして3点目としてあげられているのは、ライプツィヒ大学における音楽学関係の講義である。

当時のライプツィヒ大学で音楽学を担当していたのが、冒頭で触れたリーマン Hugo Riemann (1849-1929) とクレッチュマー Hermann Kretzschmar (1848-1924) である。両者ともライプツィヒ音楽院にてリヒター、ヤーダースゾーンに学んでおり、先に挙げたライプツィヒの音楽理論派の人間だと言える。

表2に挙げているのは、リーマンとクレッチュマーが嶋崎のライプツィヒ滞在中に行った講義の一覧である。つまり、嶋崎がライプツィヒ大学で受ける可能性のあった授業科目一覧といえる。クレッチュマーは音楽史を中心とした講義となっているが、リーマンは音楽史も含めて音楽理論ないし音楽理論史、古楽奏法の模索を兼ねたコレギウム・ムジクムといった実技系科目まで多岐にわたる授業を行っていた。本稿

冒頭において触れたように、赤井の研究（1995）では嶋崎がリーマンに理論を習っていることとされていたが、それはライプツィヒ大学において開講されたこれらのリーマンの講義を受けたものと推測され得る。

表 2：嶋崎の受講可能性のある大学での音楽学関係講義（WS: 冬学期, SS：夏学期）

・リーマン担当

コレギウム・ムジクム（歴史的室内楽実習）Collegium musicum (Historische Kammermusik-Uebungen SS 1902～WS 1905)
通奏低音声部の実習 Uebungen in Ausarbeiten einer Continuo-Stimme(SS 1902)
古代音楽 Die Musik des klassischen Alterthums(WS 1902)
記譜法史 Geschichte der Notenschrift(WS 1902)
音楽韻律論 Musikalische Rhythmik(WS 1902)
中世音楽史 Geschichte der Musik im Mittelalter(SS 1903)
和声理論 Theorie der Harmonik(SS 1903)
通奏低音入門 Anleitung zum Generalbassspiel(SS 1903)
17, 18 世紀の器楽音楽史 Geschichte der Instrumentalmusik im 17. und 18. Jahrhundert(WS 1903)
和声法（実習）Harmonielehre (Praktikum WS 1903)
対位法（実習）Kontrapunkt (Praktikum WS 1903)
一般音楽論 Allgemeine Musiklehre(SS 1904)
音楽史概説 Musikgeschichte im Umriss(SS 1904)
音楽古文学書 Musikalische Paläographie (Übungen im Übertragen alter Notierungen WS 1904, SS 1905)
音楽美学 Musikalische Aesthetik(WS 1904)
音楽学入門（文献と資料）Einführung in das Studium der Musikwissenschaft (Literatur und Quellenkunde SS 1905)
音楽韻律論と音楽形式学 Musikalische Rhythmik und Formenlehre (mit Analysen von Werken Beethovens SS 1905)
ソナタと組曲の歴史 Geschichte der Sonate und Suite(WS 1905)
歌の歴史 Geschichte des Liedes(WS 1905)
数字で書かれた古い記譜法実習 Übungen in der Entzifferung alter Notierungen(WS 1905)

クレッチュマー担当（在籍 SS1904 まで）

交響曲の歴史 Geschichte des Sinfonie (WS 1902)
音楽学演習 Musikwissenschaftliche Uebungen (WS 1902, SS 1903, WS 1903, SS 1904)
音楽史入門 Einführung in die Musikgeschichte (SS 1903)
アルベルト以降のドイツリート Geschichte des deutschen Liedes seit Heinrich Albert(SS 1903)
オペラの歴史 Geschichte der Oper(WS 1903)
オラトリオの歴史 Geschichte des Oratoriums(SS 1904)

このように嶋崎は、ライプツィヒにおける教会音楽の伝統の中で生まれ、オルガニスト教育の機運高まる音楽院で、当初の公の目的であったオルガン演奏の研究をある程度までは深めたこと確かである。しかしながら、結果論ではあるが、彼のライプツィヒ留学に真の意味を与えたのは、ライプツィヒ音楽理論学派の伝統に基づく和声・音楽理論教育、そして、ライプツィヒ大学における音楽学系の授業だったのではないだろうか。そのことは、留学後のリヒター系の和声にいささか偏った理論系の業績が示している。また、留学後の唱歌の編纂・作曲、東京音楽学校での教授活動は、こうした理論への比重が決して小さくなかったライプツィヒ留学での成果を基礎に行われたものと考えられる。

注 1. 2010 年 5 月 8 日（音楽教育史学会）、ならびに 2011 年 5 月 7 日（音楽教育史学会）における発表。

主要引用・参考文献 [*嶋崎自身の著作については表 1 を参照]

Festschrift zum 75-jährigen bestehen des königl.Konservatoriums der Musik zu Leipzig. Leipzig.1918
Prüfungsordnung für das königliche Konservatorium der Musik zu Leipzig.1908
Inskription von Akataro Shimazaki(Konservatoium Leipzig)（学籍簿）1902
Lehrzeugniss von Akataro Shimazaki(Konservatoium Leipzig)（評価書）1905
Directorium vom königliches Konservatorium Leipzig(hrsg.) Prospect（履修案内）1902-5
Meren Golz. *Das Kirchenmusikalische Institut*. Leipzig. 2000

Ludwig Klee. *Die Ornamentik der klass. Klavier-Musik. Enth. die Verzierungen der klass. Klavier-Musik, v. J.S. Bach bis auf L. v. Beethoven, leicht fasslich erklärt u. durch zahlreiche Beispiele erläutert f. Musiker u. Musikfreunde, insbesondere f. Seminarien u. Musikinstitute.* Leipzig. 1878

Doris Mundus: Erinnerung an Paul Homeyer, *Gewandhausmagazin* (1995/96)10, Leipzig.1996 S. 50-51.

Universität Leipzig (Projektbetreuer: Ulrich Johannes Schneider) *Historische Vorlesungsverzeichniss der Univertität Leipzig* (<http://histvv.uni-leipzig.de/>)

MGG:Die Musik der Geschichte und Gegenwart. allgemeine Enzyklopädie der Musik. 2., neubearbeitete Ausg. / herausgegeben von Ludwig Finscher. Kassel. 1994-2008

赤井励『オルガンの文化史』青弓社 1995

森田信一・松本清「日本における和声理論教育の歴史」『音楽教育史研究 2008』(音楽教育史学会) p.77-86. 2009

〔附記〕

Hochschule für Musik und Theater Leipzig ライプツィヒ音楽演劇大学資料室の Alexander Staub 氏からは、ホーマイヤー、パウル、ハインゼンの伝記的情報を提供して頂きました。

本論は 2009 年 10 月 3 日第 40 回日本音楽教育学会大会（於：広島大学）での発表に、論述内容範囲の変更のない程度の加筆修正を施したものであり、その時点では引用文献中の鈴木氏の研究は未発表であったことを断っておく。